

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第1集

# 政 戸 境 横 穴 群

平成 22 年度（一）原木沼津線社会資本整備総合交付金（県道道路改築）事業  
平成 23 年度一般県道原木沼津線社会資本整備総合交付金事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

静岡県埋蔵文化財センター



## 序

政戸境横穴群は田方郡函南町日守字政戸境に所在する1支群3基からなる横穴群で、その存在は古くから知られていました。今回、沼津地域と伊豆地域を結ぶ県道129号原本沼津線の道路改良工事で横穴の遺跡範囲が工事区域となったため、本格的な発掘調査が行われることになりました。

横穴群のある丘陵はその名の示すとおり、現在では函南町日守と沼津市大平字政戸を隔てる境界になっています。かつてはこの境界がそのまま伊豆国と駿河国との国境でした。境界といっても標高20m程度と決して高くない丘陵であるため、この丘陵を挟んでの地域の交流が行われたという記録も残っており、歴史的に興味深い地域と言えます。

本発掘調査では1号横穴から7世紀の須恵器が出土しました。狩野川下流域の横穴発掘調査では遺物を伴う事例が少なく、時期を特定するのが困難な現状にあります。こうした中で本発掘調査での遺物の出土は北伊豆の横穴研究にとって、一石を投じる結果になったと言えるのではないでしょうか。この時期はいわゆる天皇を中心とした畿内の勢力が全国支配を確立していく時期に当たります。横穴を通じて狩野川下流域における文化の受容や広がりを考えることは、地方における中央文化の受容の様子を知る上で意義のある調査であったと言えるでしょう。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県沼津土木事務所、函南町教育委員会ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2011年11月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝 田 順 也

## 例　　言

- 1 本書は静岡県田方郡函南町日守地内に所在する政戸境 横穴群の発掘調査報告書である。
- 2 現地調査は、平成22年度（一）原本沼津線社会资本整備総合交付金（県道道路改築）事業として、静岡県沼津土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。資料整理・報告書作成は、平成23年度一般県道原本沼津線社会资本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査および資料整理の期間は以下のとおりである。  
現地調査　平成22年5月～8月（発掘面積97.7m<sup>2</sup>）  
資料整理・報告書作成　平成23年7月～11月
- 4 本遺跡調査担当は、以下のとおりである。  
平成22年度（調査・基礎整理作業）  
所長兼常務理事：石田 彰 次長兼総務課長：松村 享  
調査課長：中鉢賢治 専門監兼事業係長：稲葉保幸  
調査第二係長：岩本 貴 常勤嘱託員：柴田亮平  
平成23年度（資料整理・報告書作成）  
所長：勝田順也 次長兼経営課長：八木利寅  
調査課長：中鉢賢治 主幹兼事業係長：村松弘文  
調査第二係長：溝口彰啓 主査：井鍋誉之 指導主事：池谷則秀
- 5 本書の執筆の内訳は、第2章第1節を柴田亮平、第4章第2節、第5章を井鍋誉之、第4章第3節は大谷宏治がおこなった。その他は池谷則秀がおこなった。
- 6 本書の編集は、静岡県埋蔵文化財センターがおこなった。
- 7 現地での基準点測量、地形測量、遺構測量、空中写真撮影は株式会社フジヤマに委託した。資料整理作業は株式会社パソナに委託した。
- 8 出土骨の鑑定は京都大学名誉教授の片山一道氏がおこなった。
- 9 発掘調査の資料は、静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

## 凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 座標は、平面直角座標Ⅷ系を用いた世界測地系を使用している。基準として、国家座標（X = -102990.0, Y = 38200.0）を起点とした。
- 2 方位は、平面直角座標Ⅷ系による方位（座標北）を基準として表示している。
- 3 本文中もしくは計測表に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修 1999）を使用した。
- 4 第2図の周辺遺跡分布図は国土地理院発行1:50,000地形図「沼津」を複写して加工・加筆した。第3図の調査区位置図は函南町地形図1~4を複写して加工・加筆した。

# 政戸境横穴群

## 目 次

序

例 言

第1章	調査経緯	1
第2章	調査経過	1
第1節	現地調査 (柴田)	1
第2節	資料整理	2
第3章	遺跡の環境	3
第1節	地理的環境	3
第2節	歴史的環境	4
第4章	調査成果	5
第1節	検出遺構	5
1	調査概要	
2	基本層序	
3	1号横穴	
4	2号横穴	
5	3号横穴	
第2節	出土遺物 (井鍋)	12
第3節	政戸境横穴群出土の人骨鑑定について (大谷)	14
第5章	まとめ (井鍋)	16

図 版

報告書抄録

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第2図 周辺遺跡分布図	3
第3図 調査位置図	5	第4図 基本土層図	6
第5図 調査前地形測量図	7	第6図 遺跡全体図	8
第7図 1号横穴展開図	9	第8図 2号横穴展開図	10
第9図 3号横穴展開図	11	第10図 出土遺物	12

## 挿表目次

第1表 作業工程表	2	第2表 遺物計測表	13
第3表 横穴計測表	16		

## 挿写真目次

写真1 出土人骨 左眼窓上縁部	14	写真2 出土人骨 頭頂骨	14
写真3 出土人骨 齒	14		

## 図版目次

図版1 1 政戸境横穴群遠景(南より)	2 政戸境横穴群近景(南より)
図版2 1 1号横穴完掘状況(南より)	2 2号横穴完掘状況(南より)
3 3号横穴完掘状況(南より)	
図版3 1 1号横穴加工痕(東壁)	2 2号横穴加工痕(東壁)
3 3号横穴加工痕(天井)	
図版4 1 古墳時代の土器	2 江戸時代のかわらけ
3 江戸時代の遺物	

# 第1章 調査経緯

県道129号原本沼津線は、沼津市中心部から東進し、同市大平から狩野川に沿って南進、函南町日守を経由して伊豆の国市原本へ連結する道路である。古くは地域の生活道、また沼津市市街地や県中部・西部から伊豆中央部や下田へ向かう経路として整備された。現在では観光・通勤時に慢性的に渋滞が発生する国道1号、国道414号の迂回路として用いられる。将来的には国道414号静浦バイパス大平インターチェンジの建設も計画されており、完成の際にはさらなる交通量増加が見込まれている。しかし、交通需要の高まりに対して、自動車のすれ違いも困難であるほど道路幅が狭い箇所が多く、交通状況改善が懸念となっていた。

平成22年度において原本沼津線社会資本整備総合交付金（県道道路改築）事業が計画され、当初より沼津市大平から函南町日守の区間の工事を実施することが決定された。しかし、工事実施に際して、工事計画範囲が周知の政戸境横穴群の遺跡範囲と重複することが明らかとなった。そこで遺跡の取り扱いについて、平成22年2月から3月にかけて静岡県沼津土木事務所と静岡県教育委員会が協議した結果、道路工事の工程上の要望から平成22年度中に本調査を実施することが決定した。これを受け、平成22年4月に沼津土木事務所長から静岡県教育委員会教育長に調査の依頼があり、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が本調査を行うことになった。

# 第2章 調査経過

## 第1節 現地調査

政戸境横穴群の現地調査は平成22年5月25日から8月31日まで実施した。調査対象面積は106m<sup>2</sup>、掘削面積は97.7m<sup>2</sup>であった。

始めに準備工として現場事務所の設営と高所作業足場、排土置場仮開などの設置作業を実施した。上記の作業を終えた6月17日、表土除去から発掘調査に着手した。斜面地のため、すべての工程で掘削は人力で行い、安全に万全を期して実施した。6月28日に表土除去は終了したが、当初造構検出作業で表面の精査だけとしていた範囲に厚さ0.3m以上の土が堆積していたため、表土除去範囲を追加した。



第1図 遺跡の位置

追加した範囲の表土除去は7月2日に終了した。追加した範囲から近世の陶磁器片や瓦、金属製品、人骨などの遺物が出土した。

6月22日からは表土除去を終えた部分から遺構検出作業を開始し、3基の横穴の存在が明確になった。遺構検出作業は7月9日に終了した。7月5日から横穴の主体部掘削、床面検出・精査を3号横穴、2号横穴、1号横穴の順に行い、7月13日に終了した。3号横穴からは出土品は確認できなかつたが、2号横穴からは近世陶磁器片、1号横穴からは須恵器、近世陶磁器片などが出土した。

7月15日に高所作業の足場仮脚、崖上調査区の仮脚を解体撤去した。7月16日から足場の下の残っていた土の掘削作業を行い、7月20日に終了した。この作業でも近世の陶磁器などが出土し、3号横穴前庭斜面から人骨が出土した。7月28日にはローリングタワーを設置して、遺構完掘状況の写真撮影を行った。遺物出土状態、遺構状態を含めた写真撮影は基本的に $6 \times 7$ 判のモノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムを使用し、空中写真撮影のみ $6 \times 7$ 判のカラーネガフィルム、モノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムを使用した。

測量業務などは株式会社フジヤマに委託した。現地調査と併行して測量用基準杭の設置、調査前現況図、遺構実測図、横穴群正面図、調査後完掘図の作成、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影等の業務をおこなった。遺構図実測は1/20、全体図実測は1/100で図化を行った。

7月29日からは撤去作業を開始し、8月6日には現地事務所、排土置場仮脚などを解体、撤去した。8月31日に沼津土木事務所に業務完了届出書を提出し、現地調査は終了した。

## 第2節 資料整理

基礎整理作業は、現地調査を実施しながら平成22年6月23日から8月31日にかけて現地事務所等で断続的に行なった。内容は出土品の洗浄・注記や図面・写真などの記録類をまとめる基礎的な作業である。金属製品や人骨は応急保存処理作業として乾燥剤とともに仮収納した。

整理作業は島田事務所で実施することとなり、7月11日より作業を開始した。最初に遺物の分類・仕分け作業を行い、接合作業を進めた。接合検討を終えたものは復原作業や遺物実測作業を実施した。7月15日から遺構写真版組、遺構図面版組、遺物・遺構トレース作業を順に行い、原稿を執筆した。これら作業と並行して報告書の編集と計測表の作成を実施した。遺物撮影は当センター写真室にて行い、フィルムは $6 \times 7$ 判のモノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムを使用した。掲載された出土品は番号順に収納し、図面資料や写真資料は必要に応じて検索できるように台帳を作成した。

第1表 作業工程表

	平成22年				平成23年				
	5月	6月	7月	8月	7月	8月	9月	10月	11月
週	4 5 1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
準備工			■						
表土除去 遺構検出掘削				■					
写真撮影 実測					■	■			
搬収工				■	■	■			
基礎整理作業				■					
整理作業 報告書刊行						■	■	■	■

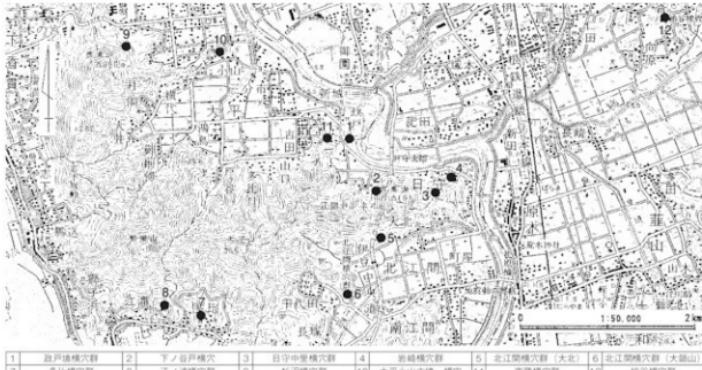
## 第3章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

田方郡函南町日守は函南町の南西部、狩野川と静浦山地に開まれた狭隘な後背湿地である。政戸境横穴群は伊豆箱根鉄道原木駅から西北西2.3km、大平山から北東の舌状支脈の東、狩野川に向かって東西300mに渡って伸びる標高20~30mの山地からやや独立した丘陵南斜面の西端、標高約13mに位置する。横穴のある丘陵は函南町と沼津市との境界で、古くは伊豆国と駿河国の境界であった。

狩野川左岸の地形は静浦山地に強く影響を受けている。静浦山地は平野部から約1kmで標高約400mの山頂に至る大平山や鷲頭山などで形成される急峻な山地であり、現在まで山裾の一部を除き開発が進んでいない。山地は新第三紀の海底火山による堆積物が本州と伊豆半島の衝突の際に隆起して形成され、静浦層群と呼ばれる海底火山の噴出物に由来する安山岩層と凝灰岩層の岩盤を基本地質とする。静浦山地の横穴は静浦層群の凝灰岩層に作られ、政戸境横穴群も静浦層群の1つ、安山岩質角礫と淡黄色凝灰角礫からなる大井凝灰角礫岩層に塗装された。静浦層群の凝灰岩層は近世以降「伊豆石」として建築材に用いられ、現在でも多くの石切場が存在する。過去には石切りで破壊された横穴も多い。

狩野川左岸の平野部には静浦山地に挟まれ、徳倉、大平、江間といった大きな後背湿地が形成されている。これは東の箱根山地から続く台地と北の三島扇状地が、標高10m前後の田方平野での狩野川流路を静浦山地近くまで押し込んだ影響である。平野部の基本地質は狩野川が氷期に掘削した古狩野谷が繩文海進によって内湾化した際の海洋性堆積物と、その後陸化した後に狩野川から持ち込まれた堆積土砂から成り立っている。静浦山地、田方平野からなる現在の地形が形成された弥生時代以来、狩野川左岸の後背湿地では、低湿地に水田、自然堤防や山麓沿いの微高地に集落が形成され、現在でも耕地や宅地として開発が進んでいる。しかし標高の低い田方平野では水害の危険性が高く、古くは709年の記録が、近世から現代までにかけては170回以上の水害の記録が残る。大平後背湿地での水害の記録は『大平年代記』に克明にその記録がされている。明確な記録は残っていないが、大平の南に位置し狩野川が造った日守の後背湿地多くの水害の被害を受けている。



第2図 周辺遺跡分布図

## 第2節 歴史的環境

伊豆における横穴は800基以上確認されており、県内において横穴が集中する地域である。全国的な動向として横穴は6世紀代に造営を開始するものの、北伊豆では狩野川右岸の柏谷横穴群などで7世紀前半の横穴が見つかっているものを最古とし、7世紀後葉から8世紀にかけて多く造営される地域である。北伊豆の横穴では前述の柏谷、大嵐山南の通称「北江間横穴群」(大北、大師山などの各横穴群)が国指定史跡として著名であるが、ここでは主に戸境横穴群が所在する静浦山地北部の横穴を中心に概観していく。

戸境横穴群の所在する日守は日守中里、岩崎などの各横穴群があり、柏谷や北江間、江浦に次ぐ、中規模程度の横穴集中地域といえる。中でも日守中里横穴群は3支群51基の横穴からなる比較的の規模の大きな横穴群である。11号横穴からTK209の須恵器が出土したことで、少なくとも7世紀中葉以前に築造が始まったことが考えられる。また、遺物は確認されていないが、25号横穴は奥壁幅4mの大型の横穴であり、7世紀中葉に築造された北江間の大師山横穴群と同様な家形石棺が納められた可能性が指摘されている。いずれにしても北伊豆でも早い段階に築造された横穴といえる。日守横穴群は、北側に位置する大平後背湿地も含めて古墳時代の集落跡が確認されておらず、横穴群の被葬者集団となる集落跡の存在が今後の研究課題といえよう。

日守より北の大平、徳倉では1基から数基と小規模な横穴群が中心に確認されている。大平と徳倉の境の丘陵に位置する大平小山横穴は7世紀末の単独横穴である。横穴に隣接して6世紀後半～7世紀中葉の古墳があり、古墳と横穴の連続性を示すものといえる。しかし、この地域の横穴はすでに開口し、推定もすんでいるため時代を特定するに至らないことが多い。

江浦湾周辺の静浦山地西斜面にも大規模な横穴群が築造されている。江ノ浦横穴群は92基と北伊豆では柏谷に次ぐ規模の7世紀後半～8世紀の横穴群である。規模とともに着目すべき点は、この地域は山地が海岸線まで迫り、非常に狭隘な平野しか存在しないことである。ここでは他の地域同様、米作を基礎とした被葬者集団の存在は肯定できない。しかし現在でも良港が多いこの地域では、海での活動を生業とした集団と推測することもできる。いまだ未調査の横穴も多く、今後研究をする地域である。

### 参考文献

- 伊豆長岡町教育委員会 1996 「伊豆長岡町史」上巻 伊豆長岡町  
伊豆長岡町教育委員会 1981 「大北横穴群」 伊豆長岡町  
函南町教育委員会 1974 「函南町史」 上巻 函南町  
菊池吉修 2007 「宗光寺横穴群 横山段横穴群」 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所  
佐野五十三、岩本貴、木村忠義 2005 「来光川遺跡群 I・II」 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所  
静岡県教育委員会 1986 「駿河・伊豆の横穴群」 静岡県  
静岡県教育委員会 1998 「静岡県内の重要遺跡」 静岡県  
清水町史編さん委員会 1998 「清水町史」資料編II(考古) 清水町  
高橋四郎 1984 「北伊豆の横穴」  
沼津市史編さん委員会 沼津市教育委員会 2002 「沼津市史」資料編 考古 沼津市

## 第4章 調査成果

### 第1節 検出遺構

#### 1 調査概要

政戸境横穴群は本調査以前よりすでに開口しており、地元では周知されている横穴であった。詳細な発掘調査は本調査が初めてである。

本調査によって標高約13mの南斜面に幅約10mにわたり、南東に開口している3基の横穴の存在が確認された。横穴はいずれも奥壁から1~3m程度を残して玄室の天井及び側壁、前庭部が崩落していた。残存した玄室もほぼ全面に土砂が堆積した状態であった。1号横穴のみがやや離れて開口し、2号横穴と3号横穴は隣接した位置関係であった。さらに2号横穴と3号横穴の残された床面が互いに接近しており、墓前域を共有していた可能性がある。残存していた天井及び側面、奥壁から、幅10cm弱の薄いU字形の鋸先状工具による削り痕が確認できた。

1号横穴の覆土からは須恵器が出土した。出土遺物と横穴の平面形及び横断面形状から判断し、これらの横穴は7世紀中葉から造営が始まったといえる。3号横穴以外の内部堆積土及び前庭斜面部からは近世陶磁器片を中心とした遺物が出土した。大部分はすり鉢と近世磁器だが、中世の伊勢型鍋等も含まれており、後世の各段階において再利用された可能性が高い。とくに横穴内の堆積土や前庭斜面部から出土した陶磁器片の多くが接合可能であった。このほか近世前期のキセル、火打金、砥石、寛永通寶などの金属製品が出土した。また、頭骨と歯と見られる人骨が出土し、肉眼による鑑定を行った結果、近世以降の成人男性であることが判明したことから、近世以降、横穴は墓として利用された可能性も指摘できる。



第3図 調査位置図

## 2 基本層序

政戸境横穴群の基本層序は第4図のとおりである。基本層序はテラス下の斜面地、頂上部を参考にして判断した。

**第1層(10YR 4/3)**：表土である。粘性が弱い。5～20cmの礫を含む。

**第2層(10YR 4/3)**：第1層同様の灰褐色で、しまりが強い粘土層である。5～20cmの凝灰岩の礫に加え5mmの赤色スコリアを含む。近世土器を中心とした遺物が出土した。

**第3層(10YR 4/6)**：褐色の粘土層である。20cm前後の礫を大量に含む。3号横穴前庭下の斜面で近世以降の男性人骨が出土した。

**第4層** : やや青色を帯びた灰色あるいは緑色を帯びた灰色の大井凝灰角砾岩層の岩盤である。この層に横穴が掘られている。横穴が掘られている凝灰岩の間に安山岩の角礫を含む凝灰岩層が縦状に堆積している。

斜面地であるため、調査範囲対象地の全てにおいて同一の層序が形成されていたわけではなく、第4層の岩盤が露出している部分も多い。第1～3層では後世の搅乱や木の根によって安定しない箇所も多い。第1～3層に含まれている礫は、第4層から崩落した礫である。礫は下になるほど大きく、量も増えてくる。礫表面は風化の影響を受け茶褐色に変色している。第2層と第3層はともに近世の遺物を出土しており、明確な時期差は不明である。横穴内部に堆積していた土も第1層、第2層と同様であり、開口後の自然堆積と考えられる。

## 3 1号横穴

天井の形状は台形、床面の形状は長方形を呈し、残存長2.96m、奥壁部幅1.5m、奥壁部高さ1.02m、中央部幅1.44m、中央部高さ1.23mである。玄室前庭の天井及び壁面はすでに崩壊しているものの平面形と断面形から他の2基の横穴より後から造営されたであろう。主軸方向はN-39°-W、奥壁底面の標高は13.8mである。両壁とも下方向から上方向に向けて掘削されていた。天井は奥壁からみて右壁から左壁方向にかけて掘削されていた。加工痕の幅は

10cm前後で、薄いU字形の鋸先状工具を用いていたと考えられる。横穴内から7世紀中葉の須恵器片が3点出土した。

## 4 2号横穴

天井の形状はややとがったアーチ形、床面はフランジ形を呈し、残存長4.30m、奥壁部幅2.66m、奥壁部高さ1.75m、中央部幅2.48m、中央部高さ1.67mである。玄室の天井及び壁面はすでに崩壊している。平面形及び断面形状から7世紀中葉～後葉の造営と考えられる。主軸方向はN-66°-W、奥壁部床面の標高は13.7mである。加工痕は左壁側で2箇所確認できた。奥壁との境部分では上方向から下方向にかけて掘削されていた。前庭部寄りでは概ね上方向から下方向にかけて掘削されているが、下方向から上方向にかけての加工痕も確認できた。

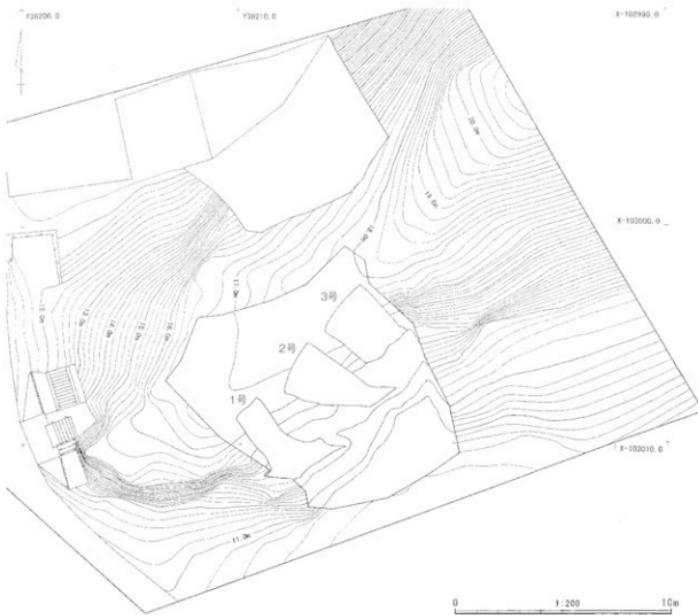


第4図 基本土層図

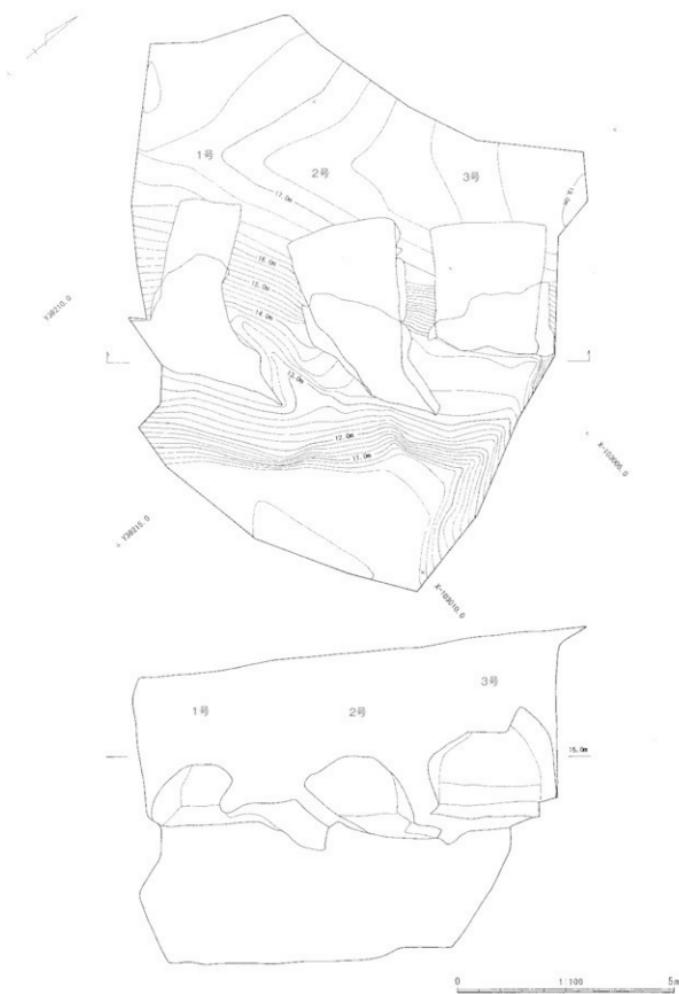
加工痕の幅は7cm前後で、薄いU字形の鎌先状工具を用いて掘削が行われている。奥壁面・床面の形状、奥壁面の上部分が手前に傾斜している点など、横穴の形状で後述する3号横穴との共通点が多い。前庭にかけて残存する床面が3号横穴に向かって曲がっていること、3号横穴より下位に位置することから2号横穴は3号横穴の後の造営の可能性が高い。横穴内から出土遺物は認められなかった。

### 5 3号横穴

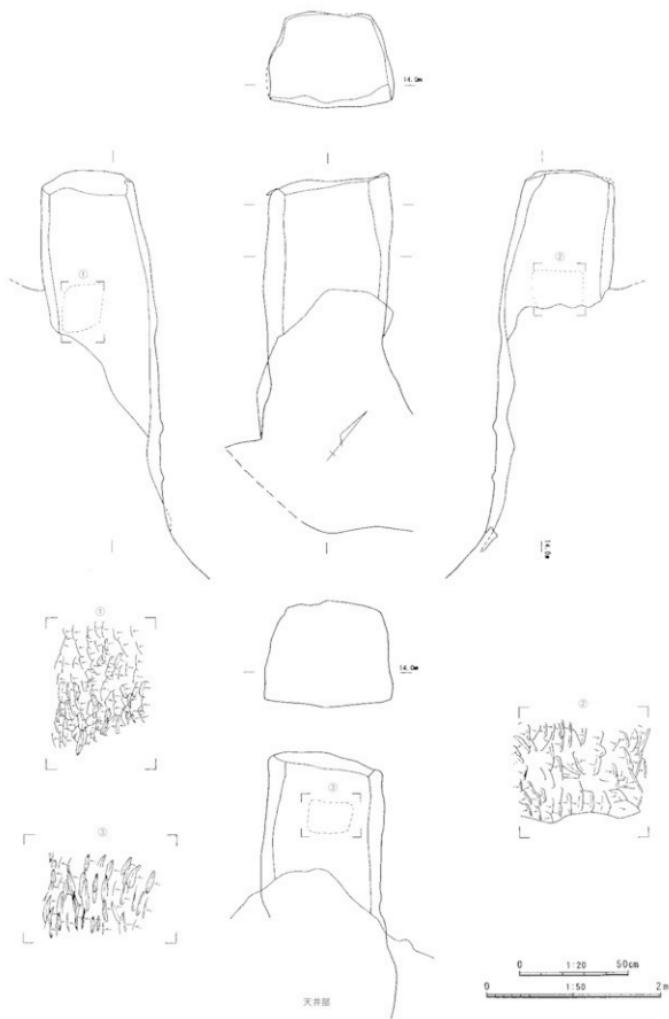
天井はアーチ形、床面はフラスコ形を呈し、残存長2.87m、奥壁部幅2.72m、奥壁部高さ1.69m、中央部幅2.48m、中央部高さ1.59mで、本横穴群では最大規模の玄室を有する横穴である。玄室の天井及び壁面に加え、奥壁部の一部も崩壊するなど他の横穴に比べ、最も崩壊がすんでいる。形状から7世紀中葉～後業の造営と考えられる。主軸方向はN-52°W、奥壁部床面の標高は14.3m、他の横穴に比べ0.5mほど高い位置で開口している。推定される玄室床面が開口部より0.2mの段差を持つ。横穴の位置、形状から判断すると3基の横穴のなかで最初に造営されたと考えられる。天井部中央で加工痕を確認できた。加工痕の幅は7cm前後、掘削方向は奥壁側から開口部むけて掘削していたと考えられる。横穴内からの出土遺物は認められなかった。



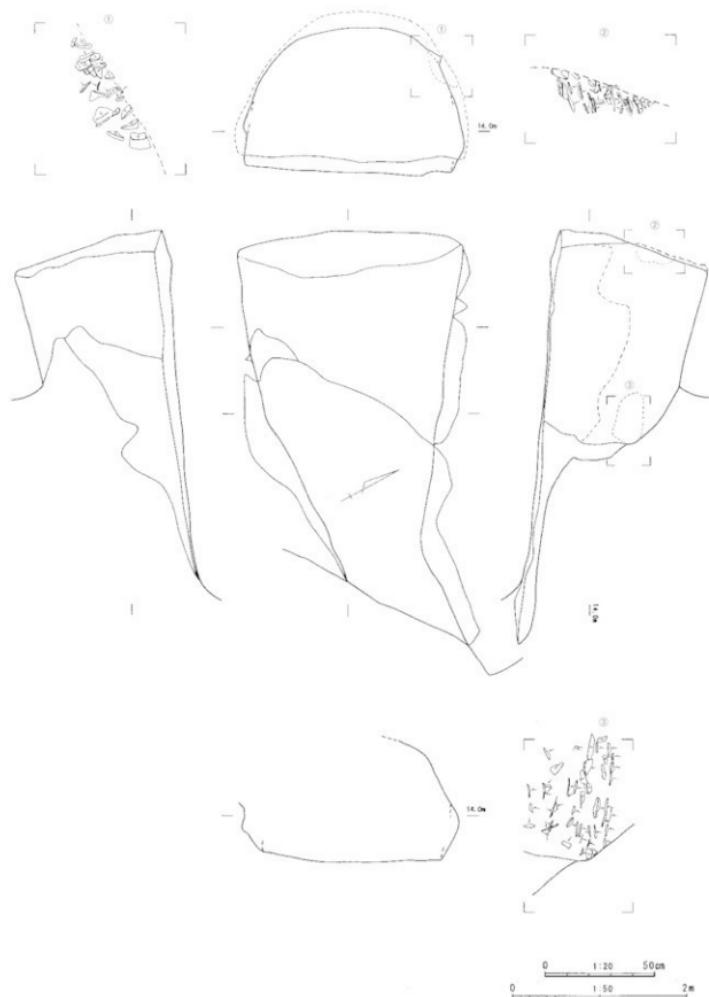
第5図 調査前地形測量図



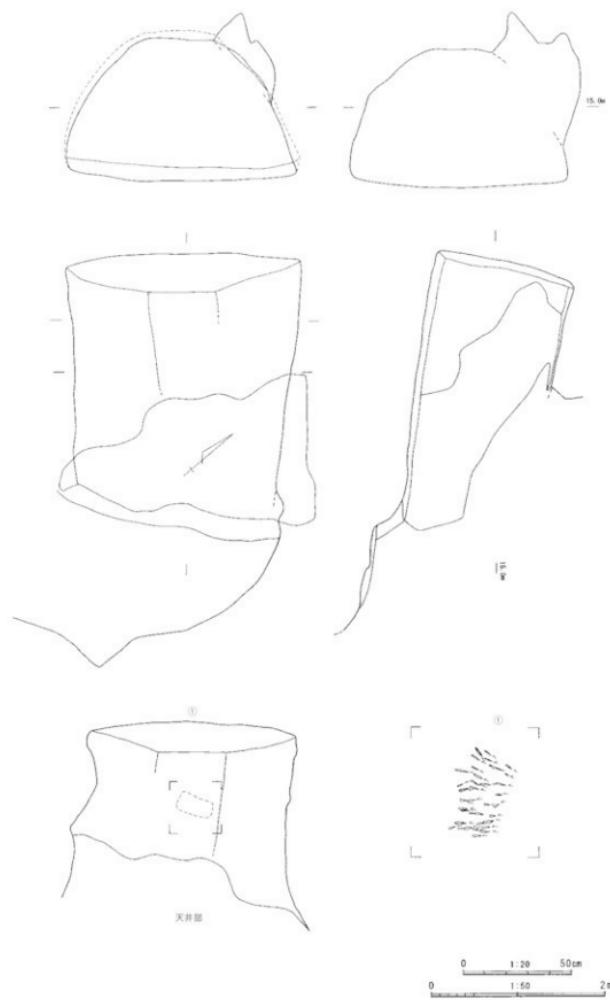
第6図 遺跡全体図



第7図 1号横穴断面図



第8図 2号横穴展開図



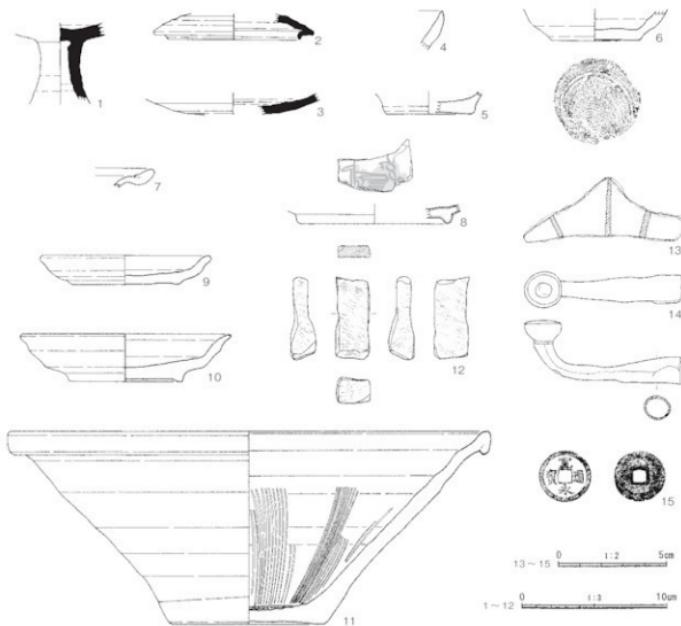
第9図 3号横穴断面図

## 第2節 出土遺物

**概要** 出土遺物の多くは斜面地の第2層出土で、遺物収納箱にして4箱分であった。そのうち近世陶磁器が大半を占める。横穴に伴う須恵器はわずかではあるが、1号横穴内より3点出土している。色調、胎土から少なくとも湖西産以外である可能性が高い。近世以降ではすり鉢が主体を占め、志野丸皿などが認められる。金属製品は寛永通寶、キセル、火打金が出土した。

**古墳時代の遺物** 1は須恵器の高坏の脚部である。ハ字に開き、小型の高坏であろう。色調は灰オリーブ色で、やや軟質である。2は須恵器の摘要である。天井部は回転ヘラ削りの痕跡が残る。かえりは受け部よりやや突出する。色調、胎土は1と類似する。3は須恵器环身としたが、蓋の可能性もある。底部はやや平坦で、削り調整が認められる。色調は灰オリーブ色で、胎土はとともに1・2と類似する。いずれも遠江IV期前葉に比定できよう。

**江戸時代の遺物** 4～6は江戸時代のかわらけである。4はかわらけの口縁部である。端部はナデにより内湾する。5は底部片で、内面にミガキは認められない。6は底部片で、外面に糸切り痕が残



第10図 出土遺物

る。体部は内湾しながら立ち上がる。内面には煤が付着しており、灯明皿として利用された可能性もある。

7は伊勢型鍋である。口縁部は内側に折り返し、肥厚する。8は染付皿である。内面に草木とおぼしきモチーフが描かれる。胎土は暗灰白色である。全面施釉で、高台内側には砂が付着する。16世紀末～17世紀前期の中国・漳州窯産であろうか。9は志野丸皿である。高台を低く削り出し、口縁部はやや外反する。釉は乳白色を呈し、やや貫入がはいる。内面にはトチン跡が2ヶ所ある。17世紀前期のものであろう。10も志野丸皿である。削り出し高台で底部外面、体部外面に重ね焼き痕が残る。体部下位で屈曲し、口縁部付近で強く外反する。内面には3ヶ所のトチン跡が残る。釉は灰色を呈するいわゆる鼠志野である。17世紀前期のものであろう。11はすり鉢である。口縁部は肥厚し、下垂する。体部は直線的に延び、下半には粗い回転ヘラ削りが残る。全面に鉄軸が施される。すり目は10本単位で、底部内面にもすり目が認められる。底部外面は糸切り痕が残る。17世紀末の瀬戸・美濃の製品であろう。この他にも同時期のものと思われるすり鉢が20個体程度認められる。

12は凝灰岩質の砥石である。長方形を呈し、5面に磨面が認められる。特に表裏中央には斜め方向に延びる縦状痕が顯著で、研ぎ減りが激しい。

13は鉄製の火打金である。山形を呈し、全長7.3cm、最大幅2.7cmである。中央に孔は認められない。縁の部分は中央で湾曲しており、使用の痕跡が認められる。14は銅製キセルの雁首である。火皿の下部には補強体が設けられている。管は銅板を巻いており、接合痕が認められる。17世紀後半であろう。15は江戸時代の貨幣で寛永通寶である。錢背には文字ではなく、古寛永であろう。

第2表 遺物計測表

番号	遺構・層位	種別	細別	残存率	反転	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調
1	1号横穴	須恵器	高环	20%	○		(5.6)		灰オリーブ 5Y6/2
2	1号横穴	須恵器	横蓋	5%	○	(9.0)	(1.8)		灰オリーブ 5Y6/2
3	1号横穴覆土	須恵器	环身?	10%	○		(1.5)		灰オリーブ 5Y6/2
4	2層	土師器	かわらけ	5%			(2.8)		椎 5YR6/6
5	2層	土師器	かわらけ	10%	○		(1.5)	(6.3)	椎 5YR6/6
6	2層	土師器	かわらけ	50%	○		(2.2)	6.1	椎 5YR6/6
7	2層	土師器	伊勢型鍋	5%			(1.3)		にかい黄橙 10YR7/3
8	2層	磁器	染付皿	10%	○		(1.3)	(10.0)	灰白 2.5GY8/1
9	2層	陶器	志野丸皿	40%	○	(11.2)	2.0	7.2	黄灰 2.5Y6/1
10	1号横穴覆土	陶器	志野丸皿	80%		14.2	3.35	7.8	淡椎 5YR8/3
11	2層	陶器	すり鉢	40%	○	(32.8)	13.5	(10.6)	にかい椎 5YR7/3

番号	遺構・層位	種別	細別	残存率	反転	最大長	最大幅	最大厚	色調
12	2層	石製品	砾石			5.5	2.3	1.75	灰白 10YR8/2
13	2層	金属製品	火打金			7.3	2.7	0.35	黒褐 7.5YR3/2
14	2層	金属製品	キセル			7.3	1.15	1.3	オリーブ黒 5Y3/2
15	表探	金属製品	貰幣			2.45		0.1	暗オリーブ 2.5GY4/1

### 第3節 政戸境横穴群出土の人骨鑑定について

京都大学名誉教授 片山 一道  
静岡県埋蔵文化財センター 大谷 宏治

はじめに 政戸境横穴群で一基の横穴墓の前庭斜面部に堆積した表土から、近世期以降の陶器とともに人骨が出土した。この人骨を肉眼観察により鑑定したので、その結果を簡潔に報告する。

この鑑定は片山が行い、その鑑定に基づいて大谷が記載することで報告を作成した。



写真1 出土人骨 左頬窩上縁部

人骨鑑定について この人骨に属するかたちで、前頭骨や頭頂骨を含む頭蓋骨の破片が20個ほど、歯が3個存在する。頭蓋骨の破片の多くは壊れすぎており、破断面も損耗しているために接合できない。歯は上顎右側の犬歯、ならびに上顎の小白歯と下顎の小白歯である。骨も歯も、ともに被熱してはいない。つまり火葬骨ではありえない。

頭蓋骨については、前頭骨の眉間部から左眼窩上縁部周辺にかけての部位が特定でき、眼窩上縁部の形状と眉間の高まりから男性骨であると断定できる。

頭頂骨とおぼしき破片もあるが、これについては頭蓋板が非常に厚いという特徴が認められる。この骨の厚さや前頭骨眉間部の強い盛りあがりなどの特徴から鑑みると、どちらかと言えば大柄で頑健な人物の骨であることがわかる。

頭頂骨には矢状縫合らしきものの一部が認められ、内板は完全に融合しているが、外板は一部のみ融合しているのが視認できる。この特徴から、熟年(40~60歳くらい)程度に達して死亡した人物の骨である可能性が指摘できる。

犬歯は後側に傾斜するように強く咬耗しており、熟年程度に達していた人のものである可能性を示唆する。これは頭頂骨で想定した死亡推定年齢とも合致する。

上顎小白歯と下顎小白歯の咬耗度は犬歯ほど強くないが、犬歯も含め、大きさや同質性から判断して、いずれも同一人物のものであろう。

ともかく、これらの骨や歯には、同一人物のものでないことを示唆する材料は、まったく見当たらない。状況的に判断して、おそらくは同一人物の骨や歯なのだろう。



写真2 出土人骨 頭頂骨



写真3 出土人骨 歯

**まとめ** 政戸境横穴群から出土した人間の骨は、肉眼観察による検査の結果、大柄で頑健な成人男性の頭蓋骨であり、死亡年齢は熟年(40～60歳くらい)程度まで達していた可能性が高いことが判明した。また、火葬骨ではないことも分かった。

死亡時期について断定的なことは言えないが、人骨の残存程度が良好であること、陳旧度も弱いことなどから、現代に比較的近い時期(江戸時代以降)のものと考えられる。

## 第5章　まとめ

今回の調査では狭い調査区であったが、3基の横穴を確認することができた。狩野川下流域左岸の横穴群の本格的な調査は少なく、貴重な資料を得ることができた。

政戸境横穴群が所在する狩野川下流の日守・北江間地域には大師山横穴群、大北横穴群、日守中里横穴群といった7世紀前半から8世紀前にかけて有力な横穴群が存在する。なかでも家形石棺、造付石棺、石櫃をもつ横穴が顕著で、畿内中枢部との強い関わりが指摘できる地域である。

政戸境横穴群が立地する地形は狩野川に向けて延びる丘陵の先端にあたり、大井凝灰角礫岩層の岩盤を掘り込んでいた。周辺の斜面南側には採石場があり、本来はより多くの横穴があった可能性が高い。

3基の横穴床面は標高約13mの南斜面に立地していた。1号横穴は等高線に対して直交し、やや單独さみに立地していた。2号横穴、3号横穴は概ね主軸や床面をそろえていることから墓前域を共有していたと考えられる。3基の横穴はいずれも天井部、側壁は崩落しており、遺存状況は良好ではないが、横穴の平面形、断面形状を推定することができた。

1号横穴の玄室は長方形で、断面は台形を呈する。2号横穴はフラスコ形で、断面はやや中央が尖ったアーチ形である。3号横穴はフラスコ形で、アーチ形を呈する。いずれも伊豆地域の横穴墓にみられる形態で、これらは7世紀中葉以降から確認することができるものの、今回の3基の横穴の築造順序は横穴の形態、立地条件から3号横穴→2号横穴→1号横穴の順に構築されたと考えられる。また、横穴内部からU字鋸先による掘削痕が確認できた。2号横穴は上方向から下方向に掘削し、1号横穴は下方向から上方向へ掘削していることがうかがえた。こうした横穴構築技法の差異が形態差や時期差と関連があるのかは不明であるが、今後さらなる資料の蓄積が必要であろう。

須恵器は1号横穴の覆土から3点確認できた。これらの須恵器から1号横穴の築造時期は遠江IV期前葉に比定することができる。また、胎土、色調から少なくとも湖西産の須恵器ではなく、在地窯の製品を考慮にいれる必要があろう。

大半の出土遺物は近世以降のもので、遺物収納箱にして4箱であった。なかでも瀬戸・美濃のすり鉢が多く認められ、このほかキセル、火打金、砥石、人骨が斜面より出土した。人骨は頭骨、歯が確認されている。鑑定の結果、大柄で頑健な熟年(40~60歳)男性であることが判明した。骨は火葬されておらず、時間的経過を経ていないことから江戸時代以降とされる。錢貨やキセルなどの出土品や人骨から江戸時代前半には墓として再利用された可能性があろう。そして、17世紀末から18世紀のすり鉢等が多く出土していることから、最終的に生活道具の廃棄場所として利用されたのであろう。

第3表　横穴計測表

	玄室床面形	天井形態	墓前域	玄室				主軸方位	副葬品	時期
				全長 (m)	奥壁部幅 (m)	奥壁高さ (m)	中央部幅 (m)			
1号横穴	長方形	台形		(2.96)	(1.50)	(1.02)	(1.44)	(1.23)	N-39°~W	須恵器3点 7世紀中葉
2号横穴	フラスコ形	アーチ形	共有	(4.30)	(2.66)	(1.75)	(2.48)	(1.67)	N-66°~W	なし
3号横穴	フラスコ形	アーチ形		(2.87)	(2.72)	(1.69)	(2.48)	(1.59)	N-52°~W	なし

図 版



図版 1

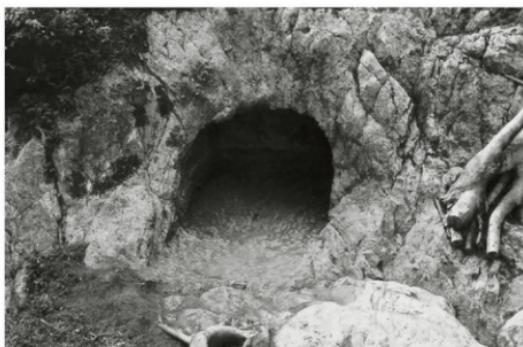


1 政戸境横穴群遠景 (南より)



2 政戸境横穴群近景 (南より)

図版2



1 1号横穴完堀状況(南より)



2 2号横穴完堀状況(南より)



3 3号横穴完堀状況(南より)

図版3



1 1号横穴加工痕(東壁)



2 2号横穴加工痕(東壁)



3 3号横穴加工痕(天井)

図版4



1 古墳時代の土器



2 江戸時代のかわらけ



3 江戸時代の遺物

## 報 告 書 抄 錄

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第1集

## 政戸境横穴群

平成22年度(一)原木沼津線社会資本整備総合交付金(県道道路改築)事業

平成23年度一般県道原木沼津線社会資本整備総合交付金事業

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年11月30日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL 054-262-4261(代)

FAX 054-262-4266

印 刷 所 株式会社 三創

静岡県静岡市駿河区中村町166-1

TEL 054-282-4031